



Title	「塩尻」覚書：伊勢物語九段「なりはしほじり」考
Author(s)	宮澤，俊雅
Citation	北海道大学文学研究科紀要，107，1-32
Issue Date	2002-08-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34026
Type	departmental bulletin paper
File Information	107_PR1-32.pdf



「塩尻」覚書

——伊勢物語九段「なりはしほじり」考——

宮澤俊雅

—

伊勢物語九段では、富士山の形を塩尻に例えている。学習院天福本⁽¹⁾によって示せば、

ふしの山を見ればさ月のつこもりに雪いとしろうふれり

時しらぬ山はふしのねいつとてか

かのこまたらにゆきのふるらむ

その山はこゝにたとへはひえの山をはたちばかりかさねあ

「塩尻」覚書

けたらんほとしてなりはしほしりのやうになんありける

とあるのがそれである。平安初中期の都人士は富士山を知らぬ人に卑近な「塩尻」によってその形を知らしめることができたのである。しかし、鎌倉時代以後の都人士には、この「塩尻」が何なのか分からなくなり、諸説紛々という状態になった。

現代では富士山の形は誰でも知っており、わざわざ何かに例える必要もないが、それでも、特に高年層であれば、富士の形は「逆さにした摺鉢」に例えるのが普通であろう。しかし、いずれ各家庭から「摺鉢」が姿を消して行けば、逆に「摺鉢」とは何かと、富士山に形の似た物を捜し求めるようになるであろう。その時に、昔からの言い伝えでは、摺鉢とは、食物を摺りつぶすのに使う土製の容器で、形が逆円錐台形をしているので、逆さにして伏せると富士山にそっくりなのだ、といつても容易に信じてはもらえず、「摺鉢」とは何かで、諸説紛々という状態になるかもしれない。伊勢物語にいう「塩尻」に比定すべきものは、平安初中期には誰でも知っていて、平安末期・鎌倉期には誰にも分からなかったもの、でなければならぬ。

二

平安初中期に卑近なものであった「塩尻」も、平安後末期には目にするのができなくなったため、やがて「塩尻」とは何かと、富士山に形の似た物を探し求めるようになったようだ。

そのような、「塩尻」の説明の中で最初のもは伊勢物語定家本諸本のいくつかに見られる勸物の中の次の記述である。

或説云塩尻壺塩といふ物あり其尻似此山

つまり、或る説では（ある人の昔語りでは、と言い換えても良いであろう）——塩尻というのは、昔、壺塩——つまり壺の形をした塩——というものがあつて、その壺塩の尻、端っこ、（壺の底に相当する部分）——の形が富士山に似ていた、というのである。

塩が固まりのまま採取されることの無い本邦では、塩は粉末状に決まっており、「壺の形をした塩」という世迷言は誰も信用しないであろう。しかし、平安初中期に壺の形をした固形塩が当たり前に流通していたのであれば、富士の形に逆さ摺鉢の形を、固形塩の端の、壺底に当る部分に例えたと見るのは、種々に言われているどの塩尻説よりも明快・妥当な説であろう。

平安期の固形塩については、『平安時代史事典』⁽²⁾の塩壺の条（市橋重喜氏執筆）に、

塩壺（しほづ） 製塩地で生産された塩を固形焼塩化し、運搬、貯蔵するための土製容器。小型の砲弾形や鉢形を呈し、

内面に布目を有するものもある。製塩工程の中で鹹水煎熬容器と、同一、同形態、あるいは別形態の容器を用いる場合が想定されるが、北九州以外の備讃瀬戸・紀伊・若狭等の土器製塩遺跡では、両者の区別が困難である。八世紀後半から九世紀前半にかけて、平城京・長岡京・太宰府等の都、地方官衙、寺院等から多く出土するが、

それ以降は急減する。『延喜主計寮式』や木簡等に見られる「堅塩」や計数単位の「顆」「果」に対応し、一般的な散状食用塩と異なつて、祭祀・工業用の特殊用途に供されたとされる。

とあり、平安極初期までの固形塩の汎用を認めているが、それ以後については、「祭祀・工業用」と限定している。また、固形塩を入れる容器の記述はあるが、固形塩そのものの形については明言が無い。平城京・長岡京では塩壺に限らずあらゆる生活物資が急減したであろうが、平安京ではどうだったのであろうか。伊勢物語成立時には既に固形塩は「祭祀・工業用」に限定され、都人士の目に触れることがなくなつていたのであるか。

奈良時代には、まだ固形塩が一般的に使用されていたことは、夙に西宮一民氏が「堅塩」考^③に詳しく論じられている。氏によれば、奈良時代には、固形塩は「きたし（堅塩）」と呼ばれ、これは「普通の塩」を、「にがり」を除き運搬・貯蔵にも便利にするために、粘土容器に入れて竈で焼成したもの、とのことである。その形を氏は「球形」と表現されているが、その鑄型になる粘土容器（土師器）は「断面図楕円形の壺状」と表現されている。従つて「きたし」は「壺型の塩」と言つても良さそうだが、底部分が摺鉢型であるのかどうか、定かな記述が無い。

しかし、この西宮氏の論によつて、古く「壺型の塩」が存在したであろうとすることは、上代文学界では周知のこととなり（中古文学界では未認定であるが）、伊勢物語勸物の「壺塩説」が世迷言ではないことも明らかになつたのである。

三

従前、「壺塩説」が重用せられなかったのは、勘物の形態にも要因があったと思われる。伊勢物語九段の富士山の項のあたりには、諸本間に異同はあるが、(1)「壺塩説」の周辺に以下の諸事が記されている。

- (2) 此語之習故好卑語
- (3) 寂蓮殊信用此説
- (4) 或本はしりほしの
- (5) 其儀不通
- (6) 先人命縦雖為塩事凡卑也
- (7) 不可用之
- (8) 心えずとてありなん
- (9) 往年有尋問人答慥不知由云々

(2)「此語之習故好卑語」は「伊勢物語の傾向として、ことさらに汚ない言葉を使う」ということであり、「塩尻」の実態が分からなくなっていたため、「尻」という語形に過敏に反応しているのである(或いは「或本はしりほし」によって「なりは尻干しのやうに」と解しているのかもしれない)。(3)「寂蓮殊信用此説」は寂蓮に批判的な記述と

「塩尻」覚書

受け取れるが、ここでいう「此説」は(2)「此語之習故好卑語」であつて、(1)「壺塩説」のことではないであろう。(6)～(9)も、何について記述しているのか明確ではない。しかし、勘物を分からぬながら順次たどつて行くと

或る説に「塩尻は、壺塩というものがあり、其の尻は富士山に似てる。」……汚ない言葉。寂蓮はこんな説を信用してる。先人の教えでは、「例え……であつても……やつぱり汚ない……採用するな。以前、人に尋ねたことがある。『確かなことは分らない』と答えた」ということだった。だから此の件に関しては「心得ず」と対処すべきなのだ。

となり、壺塩説が世迷言と受け取られて行くこととなる。

そこで、『伊勢物語決』⁽⁴⁾は

定家卿は不知といひてありなにかゝれたれども、此事鄙き物のたとへなれば、大やうに不知とはいふべきよし也

と、「塩尻」は汚ない比喩なので、例え意味が分かつていても「わからない」と言つておくのが奥ゆかしいのだとし、『伊勢物語愚見抄』(一条兼良)では

うたがはしき事をばうたがひてをくが聖賢の心也。それを愚者はしらぬといへば、はぢにおもひて、おさへて義理をつくる事あり。定家卿はよの人にかはりて、つまびらかならぬ事をば、さてをきて、一決せられず。もつと

も思慮ふかきしわざなり。

としている。

壺塩を固形塩とするものには

『伊勢物語難義注』

一、しほなり山といふ事

ふじの山をいふ也。此山いつもときはにしろたえにて見ゆる山也。そのすがた、しほをうつは物よりうちいだしたるやうに、すそひろにあるなり。むかしは、しほゝつぽにやきかためて、くちをうちわりて、うつぶしたるにたがはぬ故に、しほなり山といふなり。

永青文庫本『伊勢物語』⁽⁵⁾の書き入れには、

つほしほといふ物そのしり此山ににたりそのつほしりはしほかまのひのなかへしほをかためて入てやきたるかたちすけかさのやうにありそのしほにたり云々当流にはていかのきやうこれをもちひす

『伊勢物語聞書』にも

しほしりのやうになん有けるとは当流にはしほしりのさたなし古注にしほしりを云にかはらけつほなとしほを入てやきうちかへしてみればなりかたちうつくしきを云にや

「塩尻」覚書

と、あるが、定家の權威によつて除けている。

『伊勢物語肖聞抄』（牡丹花肖柏）には

俊成卿説、定家等は不分明事也と云々。此義殊勝也。此物語一部の肝心也。黄門の本の小書に見ゆ。

とあり、『伊勢物語宗長聞書』（柴屋軒宗長）には

なりはしほじりの、此説^{セツ}をば定家卿の小書を見侍るべし。哥道の肝心なり。

『伊勢物語直解』（三条西実隆）に

寂蓮^{ジャクレン}など此説を信用すれども定家卿は此事さらに和歌の潤色^{シユン}ならずしらぬにておくへしとかけり。誠に此儀歌道への一のをしへ也ことに絶妙なるにや。

とあり（『伊勢物語抄・冷泉為満講』もほぼ同内容）、『伊勢物語惟清抄』⁽⁶⁾（清原宣賢）・『伊勢物語闕疑抄』（細川幽斎）・『伊勢物語拾穂抄』（北村季吟）等、定家が「心えすとしてありなん」と記したことを「哥道の肝心」とまで誉め上げている。

なお、定家本勘物に関連して、近世初期には「塩たるる砂」に触れているものもある。

『伊勢物語陽成院伝』

しほじりとは、さのみ人のしるべき事にあらず。俊成卿・定家卿も、しほたれたるすなをうちあけたるやうなると心へよと、いひ置給ふなり。

『伊勢物語集注』（切臨）は、定家本勘物に関する上記の諸説を類聚した後に、次のような興味深い記述をしている。

師云 定家の勘物武田本には少かはりめあれど同じ心也塩たれし砂をば塩じりといふそれをつみ置たるが山のすがたに似たりと也俊成の養子寂蓮は此義を信用せしとぞ夷中の事なればその所の民の詞にて書たる計也此義をあきらかにしても和哥の用にも道のをしへにもならぬ事なれば不知といふて置べしと也

「塩尻」とは塩分を含んだ砂（鹹砂）から塩を垂らし落とした砂（骸砂）のことで、それを積み上げたのが山に似ているのだ、というのである。これは武田本の勘物にも見えぬ事柄であり、何をより所にこのように説いたのか興味深いし、又「鹹砂の山」説を打ち出す天野信景に一世代先んずる版本に「骸砂の山」説の記述が有ることも注目される。

江戸時代には、概して「壺塩説」に対して否定的である。

『伊勢物語童子問』（荷田春満）は

塩尻壺塩の説とるにたらず、定家卿往年有尋問人、答不知之由と有は正義なり。古書の事考極めたる事誰人もおなじ。古人しらずと今人知るまじきにもあらず。只しるをしろとし、しらざるを知らずとしてかく書置事は学者の事なり。しひて究めんとして邪説なすは悪し。定家卿しり給はずとてすてゝかんがへもせずは皆しらざるをよ

「塩尻」覚書

しとするに成ぬべし。定家卿しりたりとてこそ書伝へ給へる事あまたたがへることもあれば、心の及ぶかぎりは古実を究めんとすべし。しかりとて疑舖は闕て後の賢才を待べき也。しかれども只本文に付てその後の当不を論ずべし。此しほじり事は古來其説一決なし。されば塩じり壺塩などは文勢にたがへり。如何にとなれば、「其山は爰にたとへば」とあれば駿河国の富士山は都の人見る事かたければ、目にちかき山を以てたとへていへる故に「ひえの山を二十ばかりかさねあげたらん程して」とありて「なりはしほじりのやうになん有ける」といへば、都の人のみなれたるにこそたとへをとりて明かすべきに、海辺の塩じり壺塩をたとへていふべきにあらず。山のたとへに壺塩も塩尻も似つかはしからぬ喩なり。其海辺の事を知りたる人こそ塩尻もしるべし。都の人、近江の水海はみれども汐海をだに見る人稀なるに、増て浦の海士などのしわざの物象を以ていはゞ浦などを見ぬ人にたとへて都人にさとすべからず。たとへば近きをとりて人にさとすこそ実のたとへなり。其たとへ物にまどふたとへは人をさとすにあらずして人を迷すなり。且昔男業平とする説にして此物語業平の自記などの残り伝りたるにてもあらんかなどいふ邪を是とする謗もありて、此塩尻の説などを是とせるもあるはかたゞ、其心違へりといふべし。また是をいかにとならばなり平東国へはじめて下れる人なれば、ふじ・浅間も始て見られたる人の、何とて浦海人の塩尻などを知らるべきや。是も理り叶はず。旁以て塩尻壺塩の説論にもたるべからず。

と述べ来つて壺塩説を退けている。

『伊勢物語古意』（賀茂真淵）は

さて壺塩てふ物も都に持て出るなるべけれど、比枝の山にたとへたる対にはいとちひさかるべき壺塩をもてたと

へんにはつたなき文なるべし。此記者のいかでしか書んや。

として、富士山は当然大きいもので例えるべきで、「壺塩」のような小さいもので例えるはずがないとしている。

『伊勢物語審註』（高宮環中）は

余は半得の愚考をおもふ所あれども、わざと、こゝにはいひもらして、たゞ、御記にのみ備へたり。げには、俊成より、定家の御論に及びて、しれぬと、の給ひし事を、しれたるにいはんは、よしあしともに、憚り多かるべきものなれば、是程を申すも、慮外の至なるべしとおもふ故なり。

と、知っているのに知らないと言った定家に遠慮して自説を差し控えている。

『翁草』⁽⁷⁾（神沢杜口）は

多くは、古注に随ひて、壺塩といふ物の尻、山の形に似たる故、塩尻と云ふ、此説もしかと落着せざるなり、としている。このころあたりを最後に、壺塩説は一顧だにされないようになる。

四

「壺塩説」以外の説を逐次、見て行く。

「塩尻」覚書

「容器から地面に空け落とした塩の山」説

『書陵部本和歌知願集』

鳥、……しほじりのやうなるとは、いかなる事ぞ。

風、しがのあまのもとには、しほがまのきたのわきに口ひろきおほつぽをほりすへて、これにやくしほをばとりいれゝゝしておくほどに、ながあめのころ、しほなどもえ、やがてしほのたえたる時、しほじりいだしてつかへといふなれば、このつぽをほりいだして、にはをちりもなくはきて、そのにはに、このつぽをうちうつぶけてつぽのしりをたゝけば、そのつぽのそこに、としごろ日びろかたまりたりつるしほのおちたる時、つぽをとりてのけたれば、そのかたまりたるしほ、いたゞきはひらに、すゑ（は）ほそく、もとふとくて、しろくうつくしきが、この山に雪のふりたるすがたににたるを、業平つくしにいきたりし時、このしほじりといふものはみたりしかば、それを思ひいでゝたとへたる也

これも「壺塩」説であろうか。志賀の海士の塩釜の北傍の大壺に普段から焼塩を備蓄しておき、製塩不能の時節に大壺を引つ繰り返し「塩」を壺の「尻」を叩いて落とすと富士山のようになるのを「塩尻」という、との説だがそのことが都人士熟知とは信じ難い。

「塩釜の底の穴に溜まった塩の塊」説

『十卷本伊勢物語註』

ナリハ塩尻ノヤウニナントハ塩ヤク釜ノ尻ニ穴ヲアケノミヲ指テ汲入テニルヲ塩ノワキカヘル時ノミヲ抜テ荒塩ヲハシラカシ捨テ又ノミヲ指タレハ其穴ニ堅マリキタルシホヲ塩尻ト云此塩ヲトリテスエタレハサキハホソクモトハフトク富士ノ山ニ似タレハ云也サレハ塩尻ノ様ニト云

『増纂伊勢物語抄』・『冷泉家流伊勢物語抄』もほぼ同文。塩釜の尻に円錐台形に空けた穴に溜まる塩が、塩尻だという説であるが、そのような穴のことなど、よほど製塩に詳しい工人でなければ分からないだろうし、その穴が何のためにあけられるのかも分からない。

「製塩煎熬の際に浸出して出来る塊」説

『伊勢物語直解』（二条西実隆）

塩をやくにしたる物有てかたまれるか此山のなりににたり。是を塩しりと云

清原宣賢『伊勢物語惟清抄』・『伊勢物語永閑間書』も同様の説を引く。これも製塩工でなければ知り得ない事柄である。『伊勢物語闕疑抄』（細川幽斎）は「かたまれるを、あけたるが、山のなりに」とあり、『和歌知頭集』の説にも通ずる。

「塩尻」覚書

「笠」説

『冷泉家流伊勢物語抄』

又秘説云、□はしほじりとは市女笠イチメヨリフの名也。此笠に似たりといふ也。

市女笠をなぜ塩尻というのか分らない。

「摺鉢の底」説

『伊勢物語口決』

昔は雷盆をしほといひし也。……此盆の底のなり、此山に似たるをたとへたる也。

雷盆、つまり播盆。摺鉢を「しほ」と言つたとする説。「塩尻」は「摺鉢の底」に違ひないから、「塩」は「摺鉢」に違ひあるまいという憶測に過ぎないのでは。

「近江富士の別名」説

『伊勢物語七箇秘伝』

塩尻山にて近江の三上をさしていへるなり。三上山は富士によく似たれば、都近き名所にたとへてひえの山をは

たち斗かさね上てといひ、又は、なりは塩尻とよくかよひたるをさしていへる也。証歌、赤人、

細なみのみかみの山も海なれや 月にさし引しほじりの山

此歌にてよく知べし。疑はあるべからず。されども今しほじり山とは、歌に詠ずる事、源あるべし。

近江富士の三上山の別名が塩尻山だという説。しかし、塩尻（の）山と詠じた歌は他に聞かない。余り知られぬ別名で例えるより「なりはあふみのみかみやまのやう」と言いそうなもの。なお、『翁草』⁽⁷⁾（神沢杜口）には

亦一説に、塩じりとは近江国三上山を云ふ、此の三上山の形、不二と同じき方なればなり、是を塩じりと云ふは、此山に月の上る高下によつて潮の指引を知る故に、潮知と名づく^と云々、続拾遺集浄助法親王の御歌に、雲晴るゝ三上の山の秋風にさゝ波遠く出る月影、とあれば、潮知の説も拠有る歟。

と別解釈を挙げている。

「製塩煎熬の際に使用する籠」説

『伊勢物語懷中抄』

しほたるゝかごにふじの山にたり。此かごは、いかにもくちはいかりて、そこはほそくながき也。ふじの山のてい、いかにもそばへひろく、うゑはせまくほそき也。然らば、しほじりをうつぶせにしてほすににたり。

「塩尻」覚書

「しをり（枝折）」説

『伊勢物語拾穂抄』（北村季吟）は

朱雀院のぬりごめの業平自筆の本のうつしには、「なをばしをりの山となんいひける」とあり。……。しをりの山は、了誉古今の序抄に、此山へ枝折して入し事の故の名云々。然ども、定家卿の正本、しほじりとかゝせ給へば、外を用ふべきにあらず。

と、了誉の「しをり説」を引いて、退けている。

「塩を入れる壺」説

『勢語臆断』（契沖）には

「しほじり」は、うつほ物語藤原の君の巻に、いやしき女のいへる詞に「はたけうちいきて、むぎさすばかり、きのふなんちりあつめて侍に、のこもつほしりにいれて、まうできぬ」とかけり。此「つほしり」も何とはしらねど名に付て思ふに、壺はおほよそ上広く、そのかたすほき物なれば、それをふせて見たらんかたちなれば、壺尻といふか。今富士のなりになとへたる心同じ。器物を「しほしり」ともいふか。若両本の間にかきあやまてゐる方有るか。又延喜式に「花形塩杯」といふ物しほじりにてそれに似たるにや。峯のかたち八葉蓮華に似たりといへば、花形と云を思ひよせたり。

と思案している。

「^{なり}鳴は河口潮端」説

『伊勢物語童子問』（荷田春満）

一説は「なり」と云体勢の事にあらず。富士山鳴ことなりといへり。色葉和難の塩尻の条に、いせ物語にいふ詞に、ふじの山をいふに「なりはしほじりのごとし」といへり。塩じり、何事ぞや。一義云「鳴は」とよむべし。富士の鳴沢と云て上の池の水と火とたゝかひておびたゝしくなるなり。しほじりは川じりと云て海へ流入る所もおびたゝしくなれば云也。……川水の海へながれ入所おびたゝしくなれば、それにたとへたる義は有べけれども、此物語の「こゝにたとへば」とひゑの山を以ていへるに、海辺のたとへ似つかはしからずと覚え侍る。

「色葉和難」の説を引いている。「富士山は河口（塩水の端）の水音のような音がする」と解する説。春満は退けているが、『伊勢物語古意』（賀茂真淵）は是としている。

対の句にたとへばとて、都の比枝をあげたれば、又いづこはあれど難波の河じりのさまは都人もしる事なれば、共に大なる物もてしらせたる文の意也。……故に河尻の鳴にたとへん事は此比枝を二十許かさね上たるかたちにて、高さ^と形とは大かたしらる。

『よしやあしや』（上田秋成）は、次のように述べる。

「塩尻」覚書

比枝の山に難波の河じりを對してたとへんに文は愛^{めで}たけれど、「汐じり」と云が即河じりの事也といはんはいかにぞや思ゆ。我難波の河^{かは}後は河^{すゑ}の流^{なが}の海に入所にて、今の俗に河口と云。土左日記に「みをつぐしのほどより出て、なに波津きて川じりに入る」と有をも見よ。其わたり、さらに、汐の打よせて鳴べきにあらず。こはたゞ汐^{しほ}後^ごにて、汐さきの磯にふれて音たかきを「鳴は汐じりの」といふ歟。古哥に、打よする波を「磯にふり」とも「いそぶり」ともよめるが見ゆ。さらばいづこにもあれ、海べの汐の打よする音もてたとへしとは聞ゆべきが、猶これより他^{ほか}には見ぬ詞なればしひて定^{さだ}がたし。

近比さぬきの国へいきし人のかたる、故國にては波の磯にふる、所を汐じりと云とぞ。

「鹹砂の浸出作業の際に使う編み藁」説

『北窓瑣談』(橘春暉)

佐野山陰、淡路国福良^{ふくろう}といふ所の豪農坂東徳之助といふ人の家に、遊びしことのありしに、其家の庭にて、塩を焼^{やき}ければ、もし此あたりに、汐尻^{しほじり}といふものやあると尋^{たづ}しかば、是なりと出し見せたり。潮を打たる砂をあつめて、潮を漉す時に、其砂の上に潮を汲^{くみ}入るゝに、其砂の乱れざる為に、藁^{わら}にて前狭く末広くあみたる物をあてゝ、其上に潮を汲入るゝ事なり。此藁にて編たる物を、汐尻といふなりと教^{をし}たり。諸国にて方言違ふことなれば、他の国にても如^{かく}此物^{このもの}を、汐尻といふやしらざと語りし。尾張国の天野信景^{あまののぶかげ}、著述の書の名を汐尻と名付しは、其書に汐尻の説有るゆゑとぞ。其説はいかなる説にや。余いまだ汐尻の初巻を見ず。常に人の覚^{おぼ}しは、雷盆^{すりぼん}の事をしほじりといふ。いづれかななるや。

網み藁の製塩具だか、特に説として主張しているわけではない。江戸期の知識人が製塩工たちに「塩尻というものは無いか?」「これを塩尻と呼ぶまいか?」と尋ね回るさまが彷彿としよう。

五

前節に掲げた諸説はほとんど支持されることなく消えて行つた。そして、唯一多くの支持を得て現在、ほとんどの国語辞典・古語辞典で採用されているのが天野信景『塩尻⁽⁹⁾』の「砂塚(＝鹹砂の山)」説である。

伊勢物がたりに富士の形をしほじりのごとしといへり。歌人其汐じりを秘とす。予海浜に遊びて塩竈の煙を見しに、海民塩を焼くに砂をあつめて堆をなし畦を作す。潮水来りて砂畦をひたす。所によりて潮を設て砂畦をひたす日々にかくして後砂をつみ山様をつくり日に曝す。これを塩尻といふ。実に富士の形に似たり。海辺の俗語にて秘とする事あながちあらざれども、歌客京に居り遠海のことにとく、時さりてしる人なく、偶につたへしもの秘して是を伝えへしにこそ。

この砂塚説は以下のように継承・発展させられる。

『倭訓栞』(谷川士清)

海人の潮たるゝ砂をたればてゝ後、うちこぼしたるを塩尻といふ、今もいふ詞なり、鹵丘也といへり、一説に融

「塩尻」覚書

の大臣、ちかの塩がまを、六条河原にうつし、難波の塩をくませて、塩を焼たりしより、京家の人めづらしが
て、その塩尻のかたを焼物にして、火桶に用ゐたるをも、同じく塩尻といふを、こゝに指てたとへばといへりと
ぞ

『翁草』⁽¹⁰⁾（神沢杜口）

伊勢物語に、富士の形を塩尻のごとしと云り、歌人此を秘す。此塩尻の事は、海浜汐焼く廬^ロ辺^ヘに砂を聚^{グイ}て堆をな
し畦^{クサ}を作る、潮水来て是を浸すに、其砂の形自然と山をなし、実に富士やうの物あまた出来るなり、打よする潮
の引跡のかたちなれば、塩の尻と云ふ心にて名付たるや、元は海浜の俗語にて秘する事には非れ共、雲の上には
いと珍しく、秘せられし成べし。是尾陽白華^{クハ}翁塩尻の記の説なるに、微しく愚考を添て爰に記す。

『勢語図説抄』（斎藤彦麿）

天野信景が「しほじり」といふ書に「海民、塩をやくに砂をあつめて堆をなし畦をなす。潮水来りて砂畦をひた
す。所によりては、潮を汲てひたすなり。日々にかくして後に、磯をつみ山のやうに作りて日にさらす。」是をし
ほじりといへり。誠に富士の形に似たるよし、玉かつまにみえたり。

『伊勢物語新釈』（藤井高尚）

此の【しほじり】のことは、「塩やく浜に砂をつみあげて塚のごとくして、富士の山のかたちによく似たるものあ

り、それならん」と、師のいはれしぞよろしかるべき。古意の説は、いふにもたらぬひが事なり。

『比古婆衣』（伴信友）

近世となりて天野信景サネノリカゲの心つきたりしよし今はめづらしげもなきがごとくになりつるなり、さてもとしほじりといへるよしなるをおもへば潮をしほりたる砂の堆き処を尻としてしほり尻といへるなり、さればしほ尻とはしほり尻の略かりたる言なり、

『評釈伊勢物語』⁽¹¹⁾（新井無二郎）

塩尻とは古への塩をつくるに用ゐた砂の形をいふ。それは塩浜しほはまで砂を積みあげて、円く高く塚のやうにしたもので、その頂きに潮水を汲みかけて、日に晒したのである。富士山の形が、これに似てあるといふ意。守部の説に、こゝにといふ比叡の山の対照に、遠海の塩尻を取出すのは叶はぬ。源融公の河原院で潮を汲ませられた事は名高く、此塩尻のことを、当時京人の洽く見知つたもの故に、それを取り出して書いたので、六条河原の塩尻を譬へたのだといふのは、勝れた説である。

『ノート編 伊勢物語』⁽¹²⁾（折口信夫）

なりはしほしり みな苦心しているところ。天野信景の「塩尻」の説が出て、ようやく落ち着いた。塩田で、砂を円錐形にもりあげ、そこに塩水をかけると、だんだん濃厚な液が下に溜ってゆく。この形だと説いた。「なり」

「塩尻」覚書

は姿。玉勝間もこれを採用し、たいいてこれに従っている。しかし、その意味だとすると、いかにもしおじりが突然で、当時の人々の共通の知識だったろうか。

ここは、異本が多い。御本はあまり変っているので、誰も採用しない。かき雲が富士にかかるのを勘定に入れたのか。少しおかしい。家本「なかはしほりの山となんいひける」。通じない。半分はしほりの山といっていた。なかばは半分でなく、中ほどのこと。なからは半分。ある程度までのことか。富士の山は、駿河と甲斐とにまたがった山で、どっちかで、「しほり」の山といっていたと解釈できよう。

『伊勢物語全釈』⁽¹³⁾（森本茂）

天野信景の『塩尻』……伴信友の『比古婆衣』……によって明らかなように、「塩尻」は塩田に海水をふくんだ砂を富士山のような形に積みあげたもので、それを日に乾して塩をとる。また、塩尻は形が富士山に似るばかりでなく、日に乾いて点々と塩の浮き出るさまが、富士山にまだらに雪の残るさまにも似ていて、ここではまことに適切なたとえである。

『伊勢物語全評釈』⁽¹⁴⁾（竹岡正夫）

「塩尻」とする通説に従わざるを得ないが、そうすると『ノート編』のいうように、京都に見られない海辺の塩尻の形が、この伊勢物語九段の読者である、当時の貴族たちの「共通知識」でなくてはならず、とすれば『大成』所引の守部説のように源融の河原院に造られた「塩尻」が、共通知識となっていたと考えざるを得ない。「塩尻」

と言え、読者には直ちに河原院の著名なそれが思い浮かべられたのであろうか。

六

「砂塚」説にはいくつかの疑点がある。

まず、なぜ砂塚を、「塩山」とか「塩塚」といわないで、「塩尻」というのか。信景の『塩尻』には砂塚の図が添えられている。その塚の頂上は、よくある富士山の図のような三頂形ではなく、二頂形になっていて、ことさらに人の尻の形に似せている。だから「塩尻」というのか。

つぎに、信景は「これを塩尻といふ」と言っているが、本当に海民が砂塚を塩尻と呼んでいたのかという疑念。砂塚説が広く受け入れられて行くのは、「これを（海民は）塩尻といふ」一事が預かって大きい。信景以前に、「塩尻＝骸砂の山」説があつたのであるから、都人士が海民に「塩尻」という呼び名を教えたのかもしれない。「この砂山は何とよぶのかね」「何と呼ぶ、と言われても」「もしかして『塩尻』と言わないか」「塩尻ねえ……？」「ほら、てつぺんが尻のようになってるし」「へえ、塩尻、ですかねえ」「そう、塩尻だ」。

そして、四百年來分からなかったことが、なぜ、元禄時代に突然判明したのか、という怪異。顕昭の『六百番陳状』にあるように、鎌倉時代の都人士は製塩について全くの無知ではなかったのだから、もし、平安初期以来、砂塚が塩尻と呼ばれ続けていたのであつたなら、あれほどまでに諸説紛々の状態が起こることはなかったであろう。

『六百番陳狀』⁽¹⁵⁾には、製塩の工程が次のように記されている。

伊勢の海にあまのかくかたいとまなしながらへにける身をぞうらむる

と申歌を、さきには不審して、難_レ不_二注付_一、後に塩やく案内者等に相尋て、あまのまくかたと云事を能知て、其由委注付たり。其自筆押紙愚本に侍り。未_レ被_レ見其義こそは侍れ。更非_二門徒之今案_一に。あまは塩焼としては、塩干のかたのすなごをとりてすゝぎあつめて、其塩竈にたれて焼也。さて又其塩たれたる後のすなごをば、もとのかたにまきゝゝするを、あまのまくかたとは申す也。塩の干たるまにいそぎまくなり。又塩満てすなごに塩しみぬれば、又其砂をとりて、塩をたれてとりて、如此いつとなくいとなめば、いとまなきことによせて、いとまなくてひさしくとはざりける身をうらむるとよめるなり。久過にけるを、存_{ナガラ}へにけると、あまによせてよめるなり。其塩のみちひるかたをば田となづけて、よきあしきをわかちて、上田、下田などいふなり。皆各主之定まりて侍也。砂を又まきゝゝするゆゑに、塩みなたれとられたるすなごを、塩屋の辺に積置ては暇もなし。塩のみちひるかたは、ほられたるやうにて、砂とるべくもなくなれば、しほしむべきすなごもなくてあしかりぬべければ蒔なり。さ様にまくだにも塩に被_レ引、浪に被_レ打て、砂みな崩うせて、しほ引かたすくなくなるとぞ申。それぞ下田となづけてわろき田にするなり。よきはうるはしくてうせ損ぜぬなり。

塩浜と申は、惣て塩焼浜之名也。其中に取て、潮もさしのぼらぬ処に浜にしほやをたて、塩竈を塗て、其所にて塩をば焼也。塩干のかたと申は、塩の満干の所也。塩みちぬれば海となり、しほ干ぬれば舟ならで行かふ事、陸

のごとし。その所塩しみぬれば、すなごを、しほ干て後にとりて、塩がまにたれ入て、塩をば焼、其塩たれたるすなごをば、又もとの干潟に蒔散也。中羽などのやうなる物に入て、ふたりかきてはこぶ也。まくにはえぶり、さゞえなどのやうなる物にて、庭にすなごをまきならすやうにうるはしくかきならず也

ここに見る塩浜の製塩法は、遠浅の砂浜をそのまま塩田にしたものである。

満潮でも海水が差し上らない所に塩屋を建て、塩釜を設置し、その場所では塩を焼く。満潮時には海となり干潮時には舟を使わずに行ける陸のようになる所を潟かたといい、ここで満潮の時に塩がしみ付いた砂を、潮が引いた後に採つて、砂にしみ込んだ塩をすすいで塩釜に垂らし入れて塩を焼く。その塩が垂れ落ちた砂を、又もとの干潟に蒔き散らすのである。干潮の間に急いで蒔くのである。中羽などのような物に入れて、二人でかついで運ぶのである。蒔く時にはえぶり、さゞえなどのような物で、庭に砂を蒔き均すようにきれいに瘦き均すのである。こうしてまた潮が満ちて砂に塩がしみ込むと、またその砂を採つて塩を垂らし採る。このように繰り返し働くのである。潮の満ち引きがある潟を「田」と名づけて、上田・下田などとランクづけし、それぞれ所有者が決まっている。「田」には繰り返し砂を蒔く必要があるのだ、塩を垂らし落とした砂を、塩屋の辺りにそのまま積んで、置き放しにしておく余裕は無いのである。潮が満ち引きする潟は、そのままにしておけば、掘られたようになって、塩をしみ込ませるべき砂も無いという事態になってしまうので、潮が満ちないうちに急いで砂を蒔き戻すのである。そのように蒔き戻しても潮に引かれ、波に打たれて、砂が皆崩れて無くなり、潟も減少する。これが「下田」で低くランクづけされる。良い「田」はきれいで、崩れないのである。

「塩尻」覚書

おおむねこのような工程が記されている。自然浜の製塩は、満干のある潟がそのまま塩田となり、砂に塩をしみこませる時間も満潮時のみに限られ、砂を集め、塩をとり、砂を戻す工程も干潮時に終えていなければならない。まず鹹砂（塩を含んだ砂）を塩屋に、恐らく二人の畚で運び、海水で濯いで布網で鹹水を篩い落とし、骸砂（塩を採り落とした砂）をとりあえず塩屋の周辺に打ち捨て置き、また鹹砂を塩屋に運ぶという作業を繰り返し、それが終わると、今度は骸砂を二人畚で元の潟に運んで蒔き戻す。この骸砂の山は、塩屋の周辺に一時的に置いてあるだけで、コニーデ状に美しく積んであるはずはない。ここには、富士に似た砂塚のことも、伊勢物語の「しほじり」のことも記されていない。

信景が「塩尻」とした元禄期の砂塚は、明らかに鹹砂の山であって、骸砂の山ではない。集砂作業の後、浸出作業の前に作られるものである。この砂塚は工程上、どのような意味があったのだろうか。『塩尻』には「砂をつみ山様をつくり日に曝す」とあるのみで、何のために砂塚を作るのか詳しくは記されていないが、『本朝食鑑』⁽¹⁶⁾（人見必大）によると、これは鹹砂を乾燥させるためだという。

本邦の製塩は、基本的には海水を煮詰めて採塩するものであった。ただし海水をそのまま煮詰めるのは効率が悪いため、海藻や砂に付着した塩分を海水に溶かして、濃度の濃い鹹水にしてから煮詰めるのである。前記『六百番陳状』に見える自然浜での工程は、一度海水に浸かった砂を乾かす暇も無く、その塩分を海水に浸出させて鹹水にしている。揚げ浜・入り浜の塩田の場合は、塩田の鹹砂を天日で蒸発させる。水分の少ない鹹砂のほうが、海水に溶かした場合より濃い鹹水が得られるはずである。また、一旦天日で蒸発させた塩田に再度海水を入れて蒸発させれば、さらに濃い鹹水を得ることが可能である。しかし、一方でこれらの作業にかかる時間と労力のことも考えねばならない。時代

により、海水導入・集砂・浸出・煎熬の技術が違い、どのようにしたら効率的かも異なっていたろう。

鹹砂の山を作つて乾燥させたほうが、濃い鹹水を得易いとしても、自然浜式の塩田では作業時間を制限されるため実施は不可能とならう。砂塚の工程は、揚げ浜・入り浜にして海水を調節するなど、製塩技術のそれなりの発達をみて初めて可能となったものと考えられる。『六百番陳状』には、鹹砂を山に積むとは一言も記していない。ただ「すぎあつめて、其塩竈にたれて焼也」と、鹹砂から直接に鹹水を採取する如く記されている。この時代には、まだ鹹砂の山を作る工程は採用されていなかったのではあるまいか。

七

製塩工程の鹹砂の砂塚が文献上確認できるのは、江戸時代以後のことであるが、この砂塚が伊勢物語の「しほじり」であるとの説が容認されるようになると、今度は逆に伊勢物語が、製塩工程の鹹砂の砂塚が確認できる最古の文献と見なされるようになる。こうして平安初中期に鹹砂の砂塚の存在が認定されると平安時代の製塩技術も江戸時代類似のものと推定されて行く。そこで、平安時代には、鹹砂塚の工程のある自然浜方式が割り当てられるのである。

廣山堯道氏は鹹砂塚による製塩の歴史を次のように記述されている。⁽¹⁷⁾

北九州小波瀬の与原と曾根の塩田……は文久頃まで自然のまま堤防もなく、干潮時に鹹砂を集取して採鹹するという形態のものであつた。……この鹹砂堆積の砂山の形態は、ここでは「塩尻」とは呼んでいないが、富士山

「塩尻」覚書

に似ていたことはその附図から推察される。

斯様な「塩尻法」は、江戸時代にはかなり存在していたらしく、……元禄・享保頃には塩田と塩尻が組み合わされた鹹砂貯蔵方式ともいえる塩尻法の残滓がみられたことはあきらかである。

江戸時代の塩尻法には、……入浜系列のものと……揚浜系列のものとが存在したが、鎌倉期には前者につながる塩尻法の記録が見られる。即ち僧顕昭の建久二年の『六百番陳状』がそれである。

ともかく鎌倉初期の採鹹法は伊勢においては塩田とはいえ塩田法以前の段階即ち塩尻法よっていたということは確定的であろう。

この鎌倉初期の塩尻法は平安初期から基本的には変化なく続いているものと推察されるのであるが、それはまた……『伊勢物語』からも裏付けられる。……従って平安初期にも斯様な塩尻が存在していたものといいたいのである。

六百番陳状の段階では塩尻法のための採鹹場に所有乃至用益権が成立しており、その為に骸砂を元の浜に返さなければならなかったのである。

海岸の砂浜に所有・用益権が発生する以前においては最も原始的な塩尻法が行われたのではないかと想定されるのである。即ちそれは塩分固着の乾燥砂を採集し、それに適時海水を注ぎ鹹水を得、その骸砂はその場に放置し

ておき、転々と集砂の場所を移動していくというような略奪的採鹹法（骸砂は自然にもとんど平坦になる。すると再び集砂に利用される）ともいえるような形態である。

塩尻法とその展開を想定することによってまた伊勢物語の「塩尻」の解釈も自ら明らかとなる。恐らく塩尻法発生時には砂浜に転々と採鹹後の骸砂の山が存在したであろうが、それをまず「塩尻」と称するようになり次にまた鹹砂の山をもかく呼ぶようになったものと推定される。

『六百番陳状』の製塩工程の記述も（それは前節の引用に記述は尽きており、それだけで集砂から時き戻しまでの工程（六時間前後）を知ることができる）、廣山氏はこれを鹹砂塚による採鹹と見るため、次のような顕昭の記述していない工程を推定付加されるのである。（――は宮澤による補足説明。）

○集砂は干潮時の最も砂の乾燥している時期に行われる。（干潮時後半の二時間程度に作業が集中することになる。）

○出来るだけ多くの砂を集めて、塩屋の周辺、浸出装置の近くに「鹹砂の山」を作る。

○満潮になったら、海水を汲んできて「鹹砂の山」に注ぎ、鹹水の浸出作業をする。

○浸出作業が終わると「鹹砂の山」は「骸砂の山」になる。

○顕昭がここを訪ねたときは「骸砂の山」ができていた。「鹹砂の山」を見ていないので「陳状」にその記述が無い。

○骸砂はそのまま積み上げておく。浸出作業が終わるたびに砂を戻したりはせず、浜からとれるだけの砂を採取する。

○骸砂は塩分があるので霜がつかない、だから形は富士に似ているが白雪がないので風情がない。（これは「積置て

「塩尻」覚書

は暇もなし」を「……霜もなし」と解した為の誤解である。」

○次に干潮になると、また集砂して「鹹砂の山」を作る。

○こうして、やがて浜は砂もなくなつて掘られたようになってしまふ。

○そうなると仕方なく山積みされた骸砂を元の浜にまき返す。その作業は干潮時に急いで行われる。(最初の集砂から蒔き戻しまで、最短二七時間程度)

これは、江戸末期に、普通の塩田にくらべると三〜四倍の砂を保持し、決して潟崩れを起こすことの無かつた「最極上々田」の自然浜式塩田である北九州小波瀬塩田の工程をなぞったもので、『六百番陳状』の記述とは懸け離れているのである。

八

伊勢物語の「塩尻」は、現在、すべての古語辞典・国語辞典で「塩田で砂を円錐形に高く積み上げて、塚のようにしたもの。これに海水を汲みかけて、塩分を固着させる」のように記述している。中で『角川古語大辞典』は、

古来異説が多く、ことに秘説として解かれたため、珍奇な解釈が見受けられる。

として、「壺塩説」を珍奇な解釈の例に挙げている。

しかし、初めにも記したように、伊勢物語にいう「塩尻」に比定すべきものは、平安初中期には誰でも知っていて、平安末期・鎌倉期には誰にも分からなかったもの、でなければならぬのである。「壺塩説」はこの条件に適合し、決して珍奇な解釈とは言えないであろう。

一方、「塩尻」に比定すべきものが、平安初中期から江戸時代まで連綿と存在し、誰でも知っているものであったなら、多くの異説、珍奇な解釈は出て来ないはずである。現在有力視される「砂塚説」は、もし、（伊勢物語の「塩尻」と江戸時代の「鹹砂の砂塚」を同定し、それにより『平安初中期から江戸時代まで「鹹砂の砂塚」による製塩工程が連綿と存在していた』とする）製塩技術史の仮説に支えられているのだとしたら、この方がよほど珍奇な解釈と言えるであろう。

注

(1) 小林茂美校注『伊勢物語』（影印校注古典叢書6）、一九七六年4月、新典社。

(2) 角田文衛編『平安時代史事典』一九九四年4月、角川書店。

なお、本事典には製塩の研究として以下の論著が挙げられている。

日本専売公社編『日本塩業大系』原始・古代・中世、一九八〇年。

廣山堯道『日本製塩技術史の研究』一九八三年。

岩本正二「7～9世紀の土器製塩」（奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集刊行会編『文化財論叢』一九八三年6月、同朋舎）。

森田勉「焼塩壺考」（九州歴史資料館編『太宰府古文化論叢』下巻、一九八三年12月、吉川弘文館）。

近藤義郎『土器製塩の研究』一九八四年。

「塩尻」覚書

- (3) 西宮一民「堅塩」考——万葉訓詁の道——万葉第八三号、一九七四年2月。
- (4) 以下、諸説の引用は特に断らぬかぎり、左の論著より再引する。
 - 片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』一九六九年1月、明治書院。
 - 『伊勢物語古註釈大成』(日本文学古註釈大成)一九七九年5月、日本図書センター。
 - 竹岡正雄『伊勢物語全評釈』一九八七年4月、右文書院。
 - 片桐洋一編『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』一九八八年、一九八九年、二〇〇一年、八木書店。
 - 片桐洋一編『伊勢物語古註釈コレクション』一九九九年3月、二〇〇〇年4月、和泉書院。
- (5) 片桐洋一編『伊勢物語』(勉誠社文庫11)、一九八二年9月、勉誠社。
- (6) 『和歌物語古註集』(天理図書館善本叢書と書之部第四三卷)、一九七九年7月。
- (7) 神沢杜口『翁草』卷之四十八(日本随筆大成第三期第20卷、一九七八年4月、吉川弘文館、二五三頁)。
- (8) 橘春暉『北窓瑣談』卷之四(日本随筆大成第二期第15卷、一九七四年8月、吉川弘文館、二四八頁)。
- (9) 天野信景『塩尻』卷之一(日本随筆大成第三期第13卷、一九七七年9月、吉川弘文館、四三頁)。
- (10) 神沢杜口『翁草』卷之百十八(日本随筆大成第三期第22卷、一九七八年6月、吉川弘文館、二二五頁)。
- (11) 新井無二郎『評釈伊勢物語』一九三一年11月、代々木書院。
- (12) 折口信夫『伊勢物語』(折口信夫全集、ノート編第十三卷)、一九七〇年9月、中央公論社。一九三八年の講義。
- (13) 森本茂『伊勢物語全評釈』一九七三年7月、大学堂書店。
- (14) 竹岡正雄『伊勢物語全評釈』一九八七年4月、右文書院。
- (15) 『六百番陳状』(久曾神昇編『日本歌学大系』別卷五、一九八一年11月、風間書房)。
- (16) 島田勇雄訳注『本朝食鑑1』(東洋文庫二九六)、一九七六年11月、平凡社。
- (17) 廣山堯道『古代製塩について二、三の想定』日本歴史三〇三、一九七三年8月。